

書いたのは誰の歴史か？

—『南方移民村』から見る濱田隼雄の歴史意識—

鳳気至 純平

はじめに

第1節 歴史が語られる場

第2節 歴史を通して何を伝えるのか—1930年代日本と台湾の歴史小説を巡る言説

第3節 書いたのは誰の歴史か？—濱田の『南方移民村』

おわりに

(要約)

本論は、濱田隼雄の『南方移民村』を考察の対象とする。日本統治期の歴史研究や教育、及び同時代の日本内地の歴史文学状況、また台湾人作家の歴史文学の試みと対照させながら、在台日本人である濱田隼雄が書いた「台湾史」の意味するものを考察する。自分の血脈を探るといふ当時の歴史小説の風潮及び1940年代台湾文壇における家族史創作の試みという背景の下で、濱田の小説は在台日本人の土着化という社会状況や当時の政治状況とも絡み合いながら、台湾人の存在を描かないことで学術、教育の二つの場では言及されることのない一定程度の、地域限定且つ公式の歴史には登場しない「台湾史」を創造することに成功し、「国民の物語」とも一定程度の距離を置くことができたということを論証していきたい。

はじめに

日本統治期の台湾文壇における代表的な在台日本人作家である西川満と濱田隼雄が1930年代後半から1940年代にかけて、台湾の歴史を題材とした作品を多く残していることは、興味深い現象である。本論では、濱田隼雄の台湾農業史に関する代表作『南方移民村』を考察の対象とする。

管見によれば、現在のところ日本統治時代の台湾史を題材とする作品を論じた研究は多くなく、日本人作家に関するものに至っては、作家、作品の数が多くないこともあり、ほとんど検討されていない¹。在台もしくは旅台の日本人作家、作品の研究は近年多く行われているが、従来の研究では、その多くが「他者としての台湾（人）表象」という外からの目線で捉えられることが多かったようである。本論では、濱田が台湾で生活し、台湾の「内部」から描いたという視点から検討していきたい。

一般の小説でも同様であるが、実際に起こった出来事を題材とする場合、その出来事の中から、どれを選択し、また選択したものをどのように描くのか、ということがよりクローズアップされる。また、植民地という状況にあって、「台湾の歴史を書く」ということも一種の抗争関係—日本人と台湾人・官と民等—の中で行われたことが想像される。従って本論では、日本統治期の台湾歴史研究や教育、及び同時代の日本内地の歴史文学状況、また台湾人作家の歴史文学の試みと対照させながら、在台日本人である濱田隼雄の『南方移民村』が、どのようなコンテキストにおいて、どのような目的を持って、誰をどのように描いたのか、そしてそれが濱田にとってどのような意義を持つものであったのかということについて、考察してみたい。

第1節 歴史が語られる場

はじめに日本統治期の台湾において、台湾の歴史に関する記述がどのようなものであったのかについて整理してみたい。

成田龍一の知見を借りれば、歴史について語られる場所は大きく分けて三つあり、それぞれ「学としての歴史」、「叙述としての歴史」、「歴史教育」と名づけられる。アカデミズムの学会から学会誌、学術書など、歴史の研究を行う場としての「学としての歴史」、歴史小説をはじめとして映画やテレビというメディアを通して多くの人々に歴史を語る「叙述としての歴史」、及び学校、博物館、地域の歴史資料館によって伝えられる「歴史教育」の場は、相関的な関係をもっているといえる²。以下ではその関係に留意しながら、三つの領域における台湾史の動向を見ていきたい。

まず第一に、「学としての歴史」は日本統治期を通じてもっとも活発な領域であったといえるであろう。初期に統治対象を理解することを目的とした台湾の歴史、文化、慣習に関する調査が行われたのに続き、統治中期においては、台湾総督府史料編纂委員会による『台湾史料稿本』のほかに、1928年に創立された台北帝国大学で行われた台湾研究、例を挙げれば文政学部史学科南洋史講座村上直次郎のオランダ文献調査、土俗人種学研究室移川子之蔵の原住民伝説系譜研究、社会学講師岡田謙の村落祭祀圏研究等の研究成果が発表された。また伊能嘉矩の遺著である『台湾文化志』(1928)や矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』(1929)といった、台湾研究において現在でもしばしば引用される著作が出版されたのもこの時期である。統治後期においては、1940年代の太平洋戦争下で、台北帝大の金関丈夫、台湾総督府情報課に所属していた池田敏雄を中心として、民間の台湾人も執筆者に迎えて『民俗台湾』が創刊され、多くの台湾歴史民俗研究の成果が発表された。ただ張隆志が指摘するように、これらの研究はその多くが日本植民地研究という領域の中で行われていた³。

以上のように多くの研究成果が生み出された「学としての歴史」に対して、「歴史教育」の場ではどのような台湾史教育が行われていたのだろうか。この方面に関しては多くの優れた先行研究がある。ここでは、先行研究の成果を基にしながら、学校教育特に初等教育の場における状況を中心に見ていきたい。

学校教育の場で歴史が語られ、または教えられる場としては歴史科以外にも、国語科と修身科及び各地の学校で検討、実践された郷土教育が考えられる。周婉窈の調査によれば、1923年に刊行され、最も長く使用された第三期の『公学校用国語読本』の中で、台湾の歴史に関するものは全12巻の教科書のうち「呉鳳」、「鄭成功」、「児玉大将」の僅か三篇のみであった。「呉鳳」は神話的色彩が強いものであり、「児玉大将」は第四代総督就任時代の「匪乱」平定の事跡を描き、「鄭成功」では、鄭成功が明朝に忠誠を近い、オランダ人を打ち破ったことなどが強調され、文の最後では鄭成功を祀って台南に建てられた廟(延平郡王祠)が現在の台南神社である、ということが記されている。鄭成功の母親が日本人であったことも考慮に入れると、日本との関連のみが強調され、国語読本中に描かれた台湾はまさに周が指摘するように「歴史を欠いた台湾」であった⁴。

歴史科に関しては、台湾人を対象とした公学校で歴史科が教授されるようになったのは1923

年からである。それ以前にも用いられていた『公学校用国民読本』（1913-1922）や修身科教科書『公学校修身書（児童用）』（1914-1927）でも若干歴史に関する文章が掲載されたが、台湾に関するものはいずれも北白川宮能久のみであった。歴史科においては、日本内地で使用されていた『尋常小学国史』（1923）をもとに作られた第一期『公学校用日本歴史』教科書で台湾に関する記述が見られるのは、全45課のうち、「豊臣秀吉」、「徳川家光」と「明治天皇」の項において僅かにふれられるのみであり、1926年以降の版本には「今上天皇御踐祚」で昭和天皇が皇太子時代に台湾に行啓したことが触れられているものの、全体から見ればわずかなものであった。ただ周婉窈が指摘するように「明治天皇」の項目の中の台湾割譲に関する記述以外の部分が、日本本土で使用されていた『尋常小学国史』には見られない台湾「特注」のものであったことは指摘しておきたい。また1937年以降採用された第二期教科書においても「鄭成功の事跡」、「征台の役」といった台湾関連の歴史が五項目加えられたものの、それらは日本国史の中の「枝葉」の部分にすぎなかった⁵。

磯田一雄も「徳川家光」の項にある「台湾の歴史」を引用しながら、それが「日本人にかかわりのないことは歴史ではないという立場」に立ったものであり、教科書に描かれた「台湾の歴史」には台湾人にとっての固有な歴史は存在しなかったと批判しており、またそれが台湾人と中国との切り離しを意図したためであったと考察している⁶。

また、許佩賢は、教科書で用いられた「我が」という言葉に着目する。その「我が」が指すものが日本であり、さらにその「我が」は台湾と対立するときに使われていると指摘し、善玉/悪玉という対立の中で台湾人児童が対立者である台湾人を悪玉として認識するようになるだろう、と考察を加えている⁷。また許は別の論文においても以下のように指摘している。

日本史の叙述の中には台湾史が存在する空間は存在せず、日本と関係が生じたときのみ、ある選択性を以って日本史のコンテキストの中に取り込まれたのであり、台湾史の主体性は剥奪されたのである。この点は日本時代の台湾歴史教育の根本的な問題であるが、それだけでなく、このような歴史叙述の最大の問題は、その歴史の整理が統治者、国家の歴史であり、民衆不在の歴史、もちろん言うまでもなく台湾民衆不在の歴史であったことである⁸。

上記の歴史、国語、修身という科目以外に、昭和初期以降地方政府を主体として学校教育の場で行われたとされている「教育の実際化・郷土化」の運動に着目したのが林初梅の論考である。林によれば、この「郷土教育＝愛国教育」という概念を実践する上で、植民地台湾では、具体的に郷土愛の育成からいかに日本精神を強調する国民教育へと発展させるか、また「郷土」と「国土」がどのような関係にあるのかについて解決する必要があったとして、郷土地理、郷土歴史について具体的な事例を紹介している。

郷土地理については、可變的な空間スケールによって、同心円状に郷土を拡大させるという方法が提起された。郷土歴史について林は、公学校の郷土史に関する北畠現映の「領台以前の歴史は基本的に国史の範囲に入らないと考えていた」、という論考を紹介しながら、同時に内地人児

童の通う小学校についても検討している。それによれば、小学校の国史教育では領台以前の古跡、歴史も日本歴史との接点の有無にかかわらず教材として採用されていた。また地理、歴史の教育実践以外にも、各地で郷土室の設置、郷土調査の実施、「郷土誌」、「郷土史」などの郷土読本の編纂も行われていた。つまり「台湾という『郷土』の認識を強調するという点を重要視した」のである。

林は当時の郷土教育において「郷土の理解は愛国心の起点となる『愛郷心』を涵養する知であり、日本『内地』との接点へと発展する経路であった」として、さらに「日本との一体性」の追求に関しては以下のような二つの側面があったと述べている。一つは、「台湾人児童の郷土意識を育成して日本全体への愛国心へと結びつけること」、もう一つは「内地人児童に対して台湾を自分の郷土とする意識を育成して愛国心へと結びつけること」であった⁹。

以上のように、教育現場でも大体において「学としての歴史」と同様、より大きな日本国史の枠組みの中で台湾の歴史についての言及がなされており、その割合が僅かであったばかりではなく、多くが歴史上の著名な人物の記述にとどまり、教育現場での台湾史はまさに許佩賢が指摘するような「民衆不在」の台湾史だったのである。台湾で初等教育を受けた西川満は、学校で教わった台湾に関する歴史が鄭成功と呉鳳に関する故事だけであったと回想している¹⁰。もちろん台湾人の民間では総督府及び日本人の知らない所で別の歴史が語られており、廖添丁のような巷間に伝わるヒーローも存在した¹¹。また、台湾史研究者の尾崎秀真を父にもち、台湾で生まれ育った文芸評論家尾崎秀樹は戦後になって、台湾人の中で北白川宮が病死ではなく暗殺されたという伝説が広範囲にわたって伝えられていたことを初めて知ったのである¹²。ここでは当局、植民者と被植民者の間での歴史認識に関する乖離が見てとれる。とはいえ、日本人が強大な政治権力をバックに、学問及び教育の面で「帝国日本の中の台湾史」の創造、普及を推し進めていたのに対し、同様の背景を持たない被統治者の台湾人には、一定の規模を持って一つの台湾史を共有することは基本的に不可能であった¹³。

それでは、「叙述としての歴史」、文学に関してはどのような状況にあったのであろうか。実は、統治初期の『台湾日日新報』にも、「土匪征伐」を題材とした連載小説のようなものが掲載されている。だが、これらは文学というより単純に戦闘を記録したものが多い¹⁴。そのほかに、1914年に小野西洲によって「苗栗事件」の主謀者である羅福星を主人公とした「恋の羅福星」等が発表されたが、比較的多くの歴史小説が創作され、また文学創作に関する議論の対象となるのは台湾の新文学運動が本格化する1930年代に入ってからのことである¹⁵。そして新文学運動の盛り上がりの中で、台湾人知識人の間でも歴史の重要性が認識され始める。次節では、1930年代台湾文壇がどのような目的を持って、また何を題材として台湾の歴史を書き、またそこにどのような意義を見出していたのかについて、同時代の日本内地における歴史小説に関する論説を参照しながら整理してみたい。

第2節 歴史を通して何を伝えるのか——1930年代日本と台湾の歴史文学を巡る言説

濱田隼雄は1909年宮城県仙台に生まれ幼少期を過ごし、台北高等学校、東北帝国大学を卒業、一時東京で記者生活を送った後、1933年に再び台湾に渡り、台南、台北の学校で教鞭をとった¹⁶。その濱田が1936年に楊逵の主催する『台湾新文学』に「歴史文学について」という文章を寄稿している。濱田はそこで台湾における歴史文学の提唱は内地での「歴史文学の声」の移入であるという見解を示したうえで、そのままの移入ではなく、「台湾的現実」への適用を考慮すべきであると述べている¹⁷。この発言は、台湾文壇で起こった歴史文学に関する議論が日本内地文壇の影響を受けていたこと、また「台湾的現実」に即すべきという提言は、台湾文壇に「無批判」の移入という現状があったことを示唆している。従って、ここではまず1930年代の日本文壇における歴史文学に関する論争について簡単にまとめ、それがどのように台湾に「移入」されたのかについて考えてみたい。

先述の尾崎秀樹は敗戦、引き揚げ後に文芸評論家となり、1930年代前後のプロレタリア大衆文学論に関するいくつかの論考の中で、当時の歴史文学について触れている。1930年代の四度にわたるプロレタリア大衆文学論争の中で歴史文学が議論の俎上に上ったのは第四次の「実録文学論争」においてである。1935年4月に貴司山治、片岡貢、木村毅等十名の同人により「実録文学研究会」が結成され、同年10月から機関誌である月間『実録文学』が刊行された。実録文学が具体的にどのようなものであるかについて、研究会の趣意書にはその目的として、第一に、「全国各地方の実録（いわゆる地方資料）の蒐集」を基礎とし、「主としてとらえた題目の、現象としての、正直な姿をそのまま記録することと同時に、そのことの起こってきた原因と見られるべきものにも記録の鋒先をむけ、結果や影響にも筆の鋒先をむけなければなら」ないと記されている。そして以上のやり方で書かれた、「すでにすぎ去った現実の記録——歴史的資料の正確なる蒐集記録——と現在の生々しい出来事の実録」が実録文学であるとする。また第二の目的として「実録小説」を挙げ、当面の目標として「第一に挙げたような実録を全き基礎とした上に立って、我々は実録小説と特に銘打つ読み物を創作する。実録小説では今のところ、過去の現実を対象としたいわゆる歴史小説と従来呼ばれているものを主として作り出す」ことを掲げている¹⁸。

研究会の中心的人物であった貴司山治は、その5年前の1930年に早くも幕末の歴史を描くことで現代の問題を暗示する「忍術武勇伝」を発表し、プロレタリア文学の方向転換の可能性を提示しているが¹⁹、貴司にとって実録文学とは、『ブルジョア大衆文学の嘘とたたかい、これを衰亡させるための方法』であり、『実録を基礎にした説話的通俗的小説形式』の創造の問題であった。そしてこの「実録」は「報告」や「スケッチ」ではなく、「事象の現象面だけでなく、それと共にその原因、影響、結果、変化等に亘る調査をとげた記録」であるとする。つまり実録文学を「啓蒙よみもの」「説話的通俗的小説形式による読物」と規定したのである。それに対して徳永直は、貴司の主張がプロレタリア文学を「卑俗化」するものだと批判したが、この論争もプロレタリア大衆文学論争の焦点の一つであったプロレタリアの読者の獲得とその作品の内容をどうするかということを巡って行われたのである²⁰。またこの論争の3年前にも貴司は公開状の形で徳永直に

自らの歴史小説に関する見方を提示している。それによれば「われわれは現代の、階級闘争といふことをテーマとしてプロレタリアの積極的な姿を弁証法的に描くのが任務だ。この任務のために丁度いい題材ならば三百年前の農民なり描いてもいい」とし、「当時の現実を無視してはならない。しかし、当時の現実を通して人物や現実を描く場合——テーマは、即ちその解釈は、われわれ自身の現代の問題、階級対階級の問題にカツチリ結びつかなくてはプロレタリア小説ではない」として、現代の問題を考えるために歴史を書くという態度を表明した²¹。実録文学研究会結成の同年には、その実践として小説「桂小五郎潜行記」や戯曲「石田三成」を発表するが、後者の作品を書くに当たっても「一種の現代共通性を感じて」書いたのだと語っている²²。

また、同年には藤森成吉が『改造』に「渡辺崋山」を連載する。この作品に関しては藤森の「転向」後の「転向文学」であるという見方もあるが、無産者歌人連盟の結成にもかかわった歌人渡辺順三はこの作品をプロレタリア歴史小説として論じている。その中で渡辺は、「渡辺崋山」が豊富な史料に裏打ちされた「史実に忠実」で、平易な言葉を用いた小学校卒業程度の読者に読める作品であるとする。また、幕末の「支配的御用学問としての儒学と民間の進歩的インテリゲンチヤの蘭学との対立抗争、そしてこの進歩的インテリゲンチヤに対する支配権力の愚劣陰險な弾圧政策等々」の状況下で、進歩的思想家の中心人物としての主人公渡辺崋山等の「悲劇的運命」を描いたことは「現在の我々大衆にとつて、まことに教訓的である」と作品を高く評価する。そして最後に「かういふ歴史小説が我々の作家によつてどしどし書かれ、吉川英治や白井喬二の歴史を歪めた所謂大衆小説が駆逐されたら、どれだけ大衆のために役立つか知れないと思ふ」と文章を結んでいる²³。文学研究者の長谷川泉はこの時期の歴史小説について「事変から戦争への雰囲気の中にあつて、国家や民族の伝統精神と歴史的意識の覚醒や、また時代の圧力下にあつて現実社会の描出の制約からの脱出を試みたものであつた」²⁴と論じているが、上述したような当時の言説からは、プロレタリア文学者、刊行物への弾圧の目が厳しくなる中で、作家たちが歴史に仮託し現代を検討、批判しようという一種の退却戦が行われていたことが窺われる。

それとほぼ同じ時期、1935年12月に楊逵を中心として創刊された『台湾新文学』には、「台湾の新文学に所望する事」という特集が組まれ、上述の貴司山治、徳永直、藤森成吉といった日本の著名なプロレタリア作家が台湾の文学への期待を寄稿している。その中でプロレタリア児童文学作家の槇本楠郎は「現実の象（すがた）を生き生きと表現された作品なら、どんなに歓迎するかわからない」と台湾の現実を紹介してほしいという希望を述べた後、「貴司山治氏が『石田三成』を書き、藤森成吉氏が『渡辺崋山』を書いてゐるやうに、諸君がまた「北埔事件」や「西來庵事件」等々を書いてくれることも望んでゐる」と台湾でも内地と同様の歴史小説が生まれることへの期待を表明している²⁵。

台湾でも実際に1930年代の郷土文学論争及び芸術大衆化論争の中で、しばしば歴史を題材とする文学についての言及が見られる。陳培豊は、台湾人知識分子が、台湾人による台湾人を範囲とする文学解釈共同体創造の試みの中で、文学の中に台湾史を描くことを通して共通の歴史的記憶を呼び覚ますことを企図したと論じている²⁶。

中でも第三文学論を提唱した葉榮鐘は、自らの主催する『南音』の中で再三歴史を主題とする

文学について言及している。葉は台湾の読者に読まれるべき大衆文芸として、「我ら台湾の風土、人情、歴史や時代を背景とした面白く且つ有意義な大衆文芸が生まれることを期待する」と述べる。具体的には「開闢以来の鄭氏父子の事跡、満清時代の朱一貴、林爽文の反乱、劉銘伝、唐景崧の台湾経営、領台当時の状況や当時活躍した柯鉄虎、林少猫等の事跡、及び30年来の各種事件など絶好の創作材料」であると、最後に「台湾の新進作家よ、これらの宝庫を探索してみてもどうだろうか。この豊富な遺産は祖先が血と涙によって積み上げたものである！」と歴史小説の執筆を作家たちに呼びかけたのである²⁷。また続けて別の文章でも、実際に起こった戦争を題材として創作することの功罪を述べながら、以後戦争、災難が起こった際には、「我ら台湾の詩伯、詩翁や文人、漢学の諸先輩方には、後進に教訓を与える意味でも、偉大な文学作品の一つでも多く世に送り出してほしい」と歴史が現代に与える影響について言及している。さらに続けて「しかし、嘘を言うてはいけない、それ（引用者注：歴史）はそのように冒涇されるべきではない」と事実即して創作することを提唱する²⁸。

また、史料の蒐集についても具体的に提案を行う。葉は主として旧文学の古老たちの使命として、台湾開闢以来の台湾の郷土色——人情、風俗、歴史や名称——を描いた詩歌の整理を行うことが必要であるほかに、「史実を探し、集めること」が必要であると説くが、たとえそれが「野史、口承」の類であっても、「先人の事績や歴史上の事実を伝えるものであれば」それで十分だとする²⁹。以上の葉の提唱をもう一度整理すれば、史料の整理を通して過去の歴史を理解し、それを材料として歴史文学を創作しその作品によって読者（大衆）に現代の問題を考える鍵を与える、という意図が浮かび上がってくる。そして、「血と汗によって積み上げた」という表現や、柯鉄虎、林少猫といった抗日分子を例として挙げたことからわかるように、それは当局の公式の歴史に異を唱えることを意図したものであった。

その数年後雑誌『先発部隊』の中で頼慶が「台湾300年の歴史の中にはたくさん小説の材料があり、鄭氏渡台、明治時代の謀反事件なども興味深い創作材料である、志ある小説家がこの方面に新たな道を開拓することを心より望む」³⁰と述べ、全島規模の作家を糾合して創刊された『台湾文芸』ではその創刊号で早くも「台湾人の生活を中心としたもの又は台湾の伝説史実を材料にしたもの、及び台湾生活を刺撃するもの」という懸賞小説の募集記事が掲載された³¹。また『台湾文芸』の中心的人物である張深切は文芸大衆化に関して小文の中で「現代の（正しい）思想によって通俗的な歴史小説を書くことは（引用者注：大衆）誘導の一つの方法であると思う」と歴史小説の効用について提起した³²。同人間で行われた座談会の中で、『台湾新民報』に歴史小説を発表していた陳鏡波は以下のように発言している。

台湾の歴史を研究して其を小説化したいと思つてゐる。先達新民報に発表した拙作「落城哀艶録」は自分でも満足するに至らないが今後此の方面にも手をつけて見たい積りです。私が歴史物を書いた動機は呉三連氏の薦めに依つてであるが、大衆文学としては是非努力して見たいと思つてゐます。内地では直木三十五等の歴史小説に対してケチをつける向もあるが、歴史物に新しいイデオロギーを含ませば大衆を啓蒙する処が多いと思ひます³³。

ここで触れられている「落城哀艶録」は筆者未見であるが、陳鏡波の戦後の回想によると、「日本が台南城に攻め込んだ際に、守将が如何に敵を防ぐのに奮闘したのか」について描いた作品であったという³⁴。

以上のような台湾人作家の歴史小説に対する態度を整理、考察すると、第一には日本内地と同様、歴史を通じて現代の問題を検討し、わかりやすい内容を用いてそれを大衆にも伝える、という意図が見てとれるだろう。また、第1節でまとめた台湾における台湾歴史教育の状況を考え合わせると、公式の教育では教えられることのない「台湾史」を題材に選びそれを描こうという隠れた目的が見えてくるのである³⁵。ただ実際に『文芸台湾』、『台湾新文学』に発表された歴史小説は、それほど多くなかった。例えば、郭水潭は『文芸台湾』に「長編小説フオルモサ」を発表したものの、第一回の「序文」のみでそれ以降連載されることはなかった³⁶。『台湾新文学』には陳永邦の「本誌のモットーたる台湾の現実とか歴史を描いたものなんてありやしませんね」、「一体どこに台湾の現実とか、歴史とかいふものがありませうか？」という辛らつな言葉まで寄せられた³⁷。

ただその要因としては、『台湾新文学』の後記に黄氏宝桃の歴史小説「官有地」が「発表出来なかつた」³⁸という記載もあり、検閲などの影響も考えられ、当局が歴史を書くことについて神経を尖らせていた可能性も考えられる。言うまでもなく、葉榮鐘が例に挙げた抗日「土匪」である柯鉄虎、林少猫等、陳鏡波の「落城哀艶録」等は、ともすれば当局の推進する帝国日本の中の台湾史というイデオロギーから逸脱する恐れがあったからである。結果的には、陳培豊が指摘するように、政治、学問、教育面での背景を持たず、文学の分野においても当局からの圧力を受ける状況で、葉榮鐘が意図したような「過去の台湾を舞台として、台湾人の抵抗意識を呼び起こすような作品、もしくは共通の歴史的記憶を創造することを意図した」作品はほとんど生まれることはなかった³⁹。

一方、在台の日本人も台湾の文学雑誌において歴史文学に関する発言を行っており、さらに小さな論戦まで起こった。まず、経済学者の平山勲が『文芸台湾』誌上で、「『歴史小説への待望』の拔萃—「敗北の理論」第三章—」を発表しその口火を切る。その中で平山は、呉鳳の植民政策的意義の解明、分類械闘に対する正しい批判、単に「匪類」とみなされていた「天地会」、「蕃地」開墾を巡る「蕃人」と「支那」流民との抗争、大租戸の没落と小租戸の成長や羅漢脚の社会史的意義といった題材を小説の題材として取り上げることがを提案し、『新撰組』が大河内伝次郎の爽壯たるチャンバラから離れて維新の全貌に光明を与へると同様現台湾の生活史に光明を与ふるものならん」と単なる通俗的な歴史文学にとどまらない作品を描くことを主張する⁴⁰。

それに対し緊張関係にあった『台湾新文学』では夏川英、濱田隼雄が反論を行う。夏川は、歴史小説を創作することに基本的には賛意を表しながら、平山が作家の歴史小説を書くことを「現在の重圧からの『脱路』」とみなしたことに対し疑義を提示する。それによれば「人類の歴史を正しく実証づけ、それと連関して現実社会の正しき発展性を指示」することで、「未来の可能性」を認識することができるのであり、そこで初めて「歴史小説の意義を持つ文学が出（ママ）張されるのであり、且つ斯る見地に於いて初めて歴史小説の意義が価値づけられるのである」と述べ、

歴史小説の意義を未来への可能性を示すという点に見出す⁴¹。

夏川に続いて濱田隼雄も本節冒頭で引用した「歴史文学について」で平山を批判する。濱田は「出発点は現実だ。歴史が現代を批判する鍵を与えるのは、現実から出発して、初めて可能なことなのだ」とし、台湾の糖業史を例に挙げて次のように述べる。

糖業資本の重圧の下にあへぎ乍ら解放の道を求めてゐる蔗農、その蔗農の生活に未だつきまとつてゐる古きもの、村（ママ）建的な土地所有関係等が如何にして作られ、如何にして現在まで遺存せしめられてゐるか、等々を知るために、我々はオランダ人の糖業政策にまで遡らねばならぬのである⁴²。

平山と夏川、濱田の歴史文学に対する見方は異なっているものの、いくつか共通点も見られる。それは、内地の作家や台湾人作家が文学大衆化の観点から歴史を通していかに読者を啓蒙していくか、ということに主な焦点を置いていることに対し、彼ら三人が読者というものにそれほど大きな関心を払っていないように見えることである。ただ、多くの創作材料を提案した平山、糖業史を例にした濱田とも教育の現場では省みられることのない「台湾史」を書くことを提案した点では台湾人作家と一致しているのである。

また、濱田はそれとほぼ同時期に、楊逵が書いたと思われる『台湾新文学』の巻頭言にも疑義を加える。楊逵は雑誌の提唱した「台湾の現実又は歴史を描く文学」が反響を呼び、その議論を通じて「台湾作家」が台湾の読者のために「台湾の現実又は歴史をリアリスチックに描くべきであることが明らかにされた」と述べるが⁴³、それに対し、濱田は楊逵のいう「台湾の現実又は歴史」の指すものが不鮮明であるとし、さらに「リアリスチック」に描くことには「在ることを在るがままに描くと云ふブルジョアリアリズムも含まれる」とその危険性を指摘した⁴⁴。濱田と楊逵にどのような見解の相違が在ったのかについては史料の制約もあり、これ以上検討は加えない。ここで押さえておきたいのは、濱田が歴史小説創作を上述した貴司と同様、階級的な問題の考察、ひいては批判という目的を遂行するためのものとして考えていたことである。

濱田の左翼的色彩についてはすでに先行研究の指摘するところであり、実際に東京で出版されていた左翼的経済雑誌に数篇の台湾農業に関する論文を発表していた。濱田はその中で日本がもたらした近代的な農業、特に糖業経営が台湾の伝統的農業形態を破壊したことを指摘し、その結果としての台湾農民の顛末を「致命的な窮乏、営経（ママ）、負債、土地からの離脱、プロレタリアートへの転落である。台湾農業への資本主義の影響、それは同時に農民の債務農への転落を物語る」という言葉で表現する⁴⁵。これら1935年に書かれた一連の台湾農業に関する論文と同時期の歴史小説に対する態度を参照するなら、濱田がこの時期に台湾農業史を批判的に描く歴史小説の執筆を考えていた可能性は否定できない。

だが、実際にはこの時期に作品が生み出されることはなかった。興味深いことに、同年濱田は歴史を題材とした小説を発表しているが、それは台湾の漢人の歴史を題材とした「綺談安平蟹」⁴⁶と原住民の神話をもとにした「キナジー物語」⁴⁷という「現実を離れた」エキゾチズム

的な作品だったのである⁴⁸。結局、濱田が台湾の農業史を題材とした作品を書くのは1940年代に入ってからのことである。

再度日本文壇、台湾人、そして濱田をはじめとする在台日本人、以上三者の歴史文学に寄せた期待を比較すれば、日本文壇と濱田にとっては階級的な問題が一つの焦点となっていた。それに対し、台湾人知識人にとっては、台湾人共通の歴史的記憶の創造というのが大きな目的であったのである。

第3節 書いたのは誰の歴史か？—濱田の『南方移民村』

1940年代初頭における台湾文壇は、戦時体制下で『文芸台湾』とその対立から生まれた『台湾文学』が並立する状態で、台湾人作家の日本語の成熟とも相まって数多くの日本語文学作品が生み出される時代であった。だがいうまでもなく、総動員体制下での文学は現実の政治と無縁ではありえず、国策に呼応した作品も多く創作された。またこの時期の特徴として、植民地統治の長期化とともに、日本人の中にも長期居住者また植民地二世、三世も誕生し台湾に土着化する者が出現する⁴⁹。そして当局の推進する地方文化振興の政策の影響も受けながら⁵⁰、作品の中に地方的色彩を表現しようというのが、それぞれの文学手法を問わず多くの作家の共同認識となる。中でも、台湾の歴史というものが作品の題材の選択肢の一つとして注目されるようになったのである。早くも1938年には、西川満が幼少時代に台湾の歴史に無知であった悲しみから、その歴史を題材とした創作を行うことを提唱する⁵¹。そして、『文芸台湾』が台湾在住の日台人の作家、芸術家に対して取り上げたい事柄、場所について聞き取りを行ったところ、19人のうち11人が台湾の歴史を題材としたいと回答したのである⁵²。

アンケート回答者の中には、西川満が執筆中の「台湾縦貫鉄道」や台湾の石炭、酒の歴史について書いてみたいと答えたのをはじめ、新垣宏一が領台当初から現代、中島俊男が新式製糖業開始当初の歴史を書きたいと述べただけでなく、台湾人の作家も歴史を題材とすることを回答している。社会的条件や題材の内容及びその意図には差が見られるものの、1940年代においても台湾の歴史を描くということは台湾文壇において関心事の一つだったのである。もちろん、歴史を書く上で第2節でとりあげた「学としての歴史」は一つの背景となっていた。西川満は「台湾縦貫鉄道」創作にあたって総督府図書館の大量の資料を利用したことを回想している⁵³。また後にも触れるが、濱田隼雄も矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』を読んでいただけでなく、『南方移民村』執筆にあたってたくさんの資料を参考にした⁵⁴。

ただ戦時体制にあって台湾人作家の選ぶ題材も1930年代とは大きく異なり、例えば黄得時は描きたい歴史小説として鄭成功を挙げる。「鄭成功を中心とした明末清初の東亜の情勢、殊に日支の混血児たる鄭成功が支那大陸を始め台湾を経略して呂宋島にまで招諭の手を伸ばしたその壮図は、今日のいはゆる大東亜共栄圏の確立に髣髴たるものがある」として、「この英傑を描くことによつて漢人对満人の民族闘争と日本人对支那人の民族融和の相異なる二つの面を同時に捉へることができる」とその創作の意義を論じた。前節の1930年代の作家が日本統治初期の抗日分

子を創作題材の例として挙げていたのとは対照的に、黄の「日支の混血児たる鄭成功」や「日本人対支那人の民族融和」といった当時の体制側の言論によく見られた言葉からは歴史小説も言論統制と無縁ではなくなっていく状況が見て取れる。

その他、すでに『台湾文学』を旗揚げし、アンケートには参加しなかった台湾人作家張文環や呂赫若等もこの時期、「家族史」という形で台湾の過去を題材とした作品を残している⁵⁵。ただ、作品のスケールという点から見れば、1930年代に企図されたような台湾人共通の歴史の創造というスケールで描かれることはなかった⁵⁶。

上述のアンケートには『文芸台湾』の中心人物の一人であった濱田隼雄も当然ながら回答を寄せており、執筆の予定としてすでに東京で出版されていた『南方移民村』を含めた「台湾糖業史」をその第一に挙げている⁵⁷。では1940年代になって書かれた濱田の「台湾糖業史」はいったいどのようなものだったのであろうか。

先行研究が指摘するように、濱田が教員生活を続けながら本格的に作家としての文筆活動に入ったのは、『文芸台湾』の創刊した1940年以降のことである。初期には「病牀日記」、「横丁之図」、「公園之図」といった、台北に住む内地人の庶民を描いた作品で高い評価を受け、1941年より台湾東部の内地人農業移民を題材とした長編『南方移民村』を『文芸台湾』誌上で連載を始める⁵⁸。松尾直太は国分直一へのインタビューの中で、濱田が1940年半ばにはすでに『南方移民村』の執筆を始めていたことを聞き出している。国分は濱田の台南高女時代の同僚で、歴史を教えながら台湾の民俗研究を行っていた。両者は1940年代に三度にわたって新聞、雑誌で往復書簡をやり取りしており、濱田が台北に行ってから交流が続いていた。『南方移民村』に出てくる指導員・国分は国分直一からとったものだとされている⁵⁹。

作品の梗概を簡単に記すと、小説は台湾東部に移住した日本の東北出身の移民が移民村「鹿田村（実在するのは鹿野村）」で甘蔗栽培に苦闘しながら従事する姿を描き、結末では、幼少のころから移民村で育った農民が移民村の開拓をあきらめ台湾を離れ南方へと「進出」することを決意するところで幕を閉じる。実際に存在した移民村をモデルとした作品である。河原功は本作品の問題点として「台東製糖の『移民事業』の欠陥が曖昧にされていること」、「鹿野村農民と台東製糖の対立がほとんど描かれていないこと」、「後半での『南方への移住』という急転回」の三点を指摘している⁶⁰。一般の創作の場合もそうであるが、実際に起こった出来事を題材とする場合、そこから何を取捨選択し、それをどう解釈しさらにどのように叙述するのか、ということがよりクローズアップされる。以下では濱田が『南方移民村』においてどのような選択、解釈、叙述を行ったかについて見ていきたい。

まず、濱田が東部の貧しい移民村を選択したことについては、先行研究も多く引用する濱田の作品「技師八田氏についての覚書」においてその経緯が記されている。そこでは「私が小説を初めてかきだした時、この台湾での人間生活、殊に内地人の生活に対して否定的であつた。美しさが発見できず、汚なさ、嫌らしさがいつも目の先にぶらさがってきた」、そして「私は悲しかった。やるせないあまり、世間にみすてられた老小使や不良少年や泥棒や円公園で水餃をうる少年の人間的な美しさをかきながら、その美しさをもとめてゐる自分に気がつくと、私はこん畜生と

無性に腹がたち、又悲しくなつた」とあり、ここで濱田のいう「内地人の生活」が主に台北在住のものを指していることがわかる。そんな中、濱田は「この島の僻隅に黙々と熱帯の土地をひらいてきた移民村の人々」が「村の三十年の苦闘がむくいること極めて薄く、離村の問題が今尚ある」状態であることを見出し、「憑かれたもののやうに彼らのいきつづけた姿を」描くことになる⁶¹。ここからは空間的に都市と対照的な存在としての農村を描くという濱田の意図が見えてくる。さらに描く対象の人物としては、短編小説「病牀日記」の女主人公の口を借りて「湾生インテリ」をこき下ろす場面を挿入していることも考慮に入れると、都市インテリと対峙する存在としての農民という構図も見えてくる。

張文薫は左翼運動家の転向という視点から『南方移民村』を論じている⁶²。確かにこの時期「農民文学」、満洲移民の開拓を描いた「大陸文学」といった国策文学が多く発表されており、農民文学の伊藤永之介、葉山嘉樹だけでなく、また大陸文学もその多くが徳永直（「先遣隊」）、湯浅克衛（「先駆移民」）や立野信之（「後方の土」）、和田伝（「大日向村」）といった旧左翼作家の手によるものであり、濱田の作品もその一環に位置づけられるだろう⁶³。実際に濱田も『南方移民村』を執筆したときの心境を以下のように述べている。

その頃東京では満洲移民を国策にのってかいたものが多く出た。大日向村などというのである。それらを読むと僕には不満が起こった。きれいごとになっていすぎる。移民の実際の辛苦はリアルに描かれていないではないか。僕は台湾の植民地農業の勉強をしているうちに、甘蔗農業の実態にいくらか触れていた。帝国主義的な日本の糖業資本に収奪されている台湾農民のことがばかりでなく、内地の貧農も亦甘蔗移民となってきた揚句に今尚零落しつづけているのにおどろいていた。だから満洲の移民小説を信じられなかった。怒りをも感じた。移民なんてそんな簡単なものではないぞ、という気持ちで書きだしたものである⁶⁴。

つまり作品執筆の動機として「満洲移民政策への抵抗」⁶⁵という意図があったのである。

張は濱田が医師神野、巡查石本、指導員国分を移民村経営の中心人物として設定した点に着目し、濱田が「『知識階級が無産階級を指導する』という固定的構図を捨てきれずに」、神野、国分に「国家の代理人」としての身分を与えたことで、「元来無産階級とその対立面であるはずの資本家と国家装置の敵対関係を解消させ、さらに無産階級を前進させる指導者としての存在としてしまい」、「『南方移民村』は左翼運動の末路、文学が国家装置に取り込まれる悲哀を表現することになった」と論じている⁶⁶。この知見をもとに一步進めると、また違った一面が見えてくる。例えば、作中で製糖会社から派遣され精力的に村の生産力、生活向上に努めた国分は物語の中盤で暴風雨の際に水路に転落し命を落とす。また物語のモデルとなった鹿野村に実在する医師神野（実名は神田全次）は終盤では高齢のためほぼ隠居状態になり、物語序盤の存在感は影を潜める。その描写に対しては、当時の評論で「既に老境に入りて、事終りぬと、蠟燭の消え行くが如くに、理想も希望も、壊滅霧散する、鹿野村医師神田金（ママ）次先生の、淋しくも、悲しき終曲編に対して、私は断々乎として抗議する」⁶⁷という批判を浴びたことから、知識階級の退場が当時

の読者にも強く意識させられたことがわかる。

さらに終章においては、戦場から復員した移民村育ちの農民弥太郎が幼馴染の一太と共に村人の愚痴を根気よく聞いて回る場面が挿入されるが、濱田はそれについて「その愚痴の中にこそ本当の村の叫びがあつたからである。国分も圭介も誠実な人ではあつた。が、生れつきの農民ではなかつた。村の人たちの心底は、誠意をもつて見極めようとはしたが、何か割り切れぬものが残つてゐた。それが弥太郎と一太では、とことんまで聞かせることも、聞くこともできたのである」と評価を付け加える⁶⁸。つまり終盤において、元来の指導される立場から自分で考え、行動する農民が出現し、知識階級との比較の中で村人と同じ境遇にある農民の優位性が確認されるのである。そして、物語はその弥太郎がさらなる「南方」への移民を決意するところで結末を迎える。仮に「知識階級による指導」という描写によって小説が「国家装置」に取り込まれたとするなら、物語最終盤における主導権の知識階級から農民への移動は、既存の階級関係の転換、さらに国家装置からの解放を意味することになりはしまいか。だが、実際には自ら考え行動した農民によって「南方」への決意が語られるのであり、それは知識階級によって農民が国家装置へと導かれたのではなく、「自らの意思」によって国家装置への参入を決めたことを意味するのである。

文芸評論家の竹村猛は『南方移民村』について、「この作品を貫く一つの主張は、作者の移民村に対する限りない愛情である」とし、「作者はこの四十年の間の移民村の人たちの一喜一憂にはつとめて巻き込まれない様に身を遠去けながら、絶えず一貫した村自体への愛情を大事に育ててゐる」という見方を提示した。そして、その中心人物が三人の知識階級から移民たちに移っていく変化を追いつつながら、「作者は、描かうとする移民村への愛情の為に、僅かにこれらの人物をその触媒としたのである」と指摘し、さらに「事の成否は別としても、少なくとも作者はこの村が移民以外のヒーローによつて動かされることには眼をつむることが出来ないに相違ない」と濱田の意図を推察している⁶⁹。濱田の創作意図、小説の内容そして竹村の評論を総合すれば、濱田が描こうとしたその焦点が移民村とそこに住む農業移民の歴史であったことは明らかであろう。

また濱田の「愛情」は本人の出身とも関連付けて考えることができる。濱田は東北仙台の出身であるが、当時の東部移民の多くが「本島の風土と懸隔甚だしからざる九州、四国地方」から選定されていたのに対し⁷⁰、小説のモデルとなった鹿野村は東北と新潟からの移民たちで大部分が占められており⁷¹、濱田と同郷の東北出身の者達であった。また、神野医師夫婦も東北出身であるだけでなく⁷²、移民村を特別気にかけて、村人に「東北の雪国人独特の口の中に籠つた物の云ひ方」をする村人と同県出身の庁長を登場させた⁷³。尾崎秀樹は日本の歴史文学の中に父祖の歴史をさかのぼり、そこに自らの血脈を探った作品が多く存在するとし、1930年代後半から40年代にかけて書かれた島崎藤村の『夜明け前』、本庄陸男の『石狩川』等をその例に挙げており⁷⁴、また『南方移民村』を論じた際には、『石狩川』との類似性に言及している⁷⁵。この論点を参考にするならば、鹿野村をモデルに選んだ『南方移民村』には濱田のルーツ探しといった意味合いも見えてくる。事実、濱田は上述のアンケートにおいて取り上げたいテーマの第三に「先祖以来の僕の歴史」を挙げており⁷⁶、さらに戦後は雑誌『新みやぎ』に「宮城県民のたたかい」という江戸時代から現代にわたる長大な歴史小説を連載している⁷⁷。再版本『南方移民村』（1942年11

月)には「台湾在住の人たちさへよく知つてゐない移民村の美しさと逞しさを、何とかして広く知らせ度いといふ気持ちに駆られて書きつづけた」という濱田の「あとがき」が付された⁷⁸。メディアに「台東庁発展の一つの癌」⁷⁹と評された鹿野村という濱田の選択には、同じ東北から来た「美しく」「逞し」い人々の台湾での歴史を描こうという意図が見え隠れするのである。

矢内原忠雄は『帝国主義下の台湾』の中で、台湾東部の移民事業について論じ、

巨大なる資本の蓄積輸出の膨張は無いであろうが、その代りここには平和と自由とが支配するであろう。資本家の企業の勃興をもって目的と為さず、複雑なる人種の構成を有する植民地社会の平和なる協同的生活に目標を置かば、眇たる東部台湾も人類の植民史上最も重要な地位を獲得するであろう。地形上及び経済上比較的資本主義的勢力と離隔たる別天地たる東部台湾はかくの如き植民地社会的実験場として最も価値を發揮せしめられるであろう。アダム・スミスの口吻を借りていえば、これ私のユートピアかも知れない。しかし同化上及び国防上これを我が民族的根拠地となさんとユートピアよりは無害であり、実行性に富み、遙かに心思を高からしむるものであらう⁸⁰。

濱田は矢内原の著作に触れていた⁸¹。左翼運動において挫折を経験し、台湾の都市生活の中でも共感を得られるような題材が見つからない状況で濱田が見出したのは、台湾在住者も多くが知らない「資本主義的勢力と離隔たる別天地たる」東部の移民村に住む同郷の農民たちの世界だった。そこは作家濱田隼雄にとってまさしく一つの「ユートピア」と映ったのではないだろうか。

かつて社会変革の理想に燃え、その実践に身をひたしたことのある濱田にとって、「南方移民村」は、本庄陸男が「石狩川」で描こうとしたものと共通した要求に発していた。彼は東北人特有のねばりで、移民たちの歴史を描き、そこに自分自身の新しい展開をこめた。しかし時代は彼の願望を裏切り、この長篇に時局的な歪曲を焼付ける。「南方移民村」は本来、開拓民の苦汗にあふれた敗残の歴史ではありえても、当局がよるこんでとびつくような「南方経営」の光輝ある発展史ではなかった⁸²。

濱田は戦後の回想の中で、尾崎秀樹が書いた上記の評論が結末での妥協を指摘したことについて、その正しさを認めているが⁸³、約五十年前に書かれたこの『南方移民村』評は濱田の意図及びその挫折を見事に言い当てている。1930年代に志した「リアリスチック」に「現代を批判する」台湾農業史を創作することが不可能な時代にあつて、台湾の片隅で苦闘する同郷の農民を描くことを選んだのである。そして、しばしば中央＝日本との関連性が顔を出すものの、基本的に「満洲事変といふ大きな国家的進展も、郷里からの消息で、誰の息子が戦死したさうなと聞けば身近に感じられるだけで、杳かに遠いもののやうであつた」⁸⁴というような雰囲気にあつた移民村を描くことは、創作に当たって総動員体制の言論統制下にあつた当時の政治、社会状況からある程度距離を保つことを可能としたのである。成田龍一は1930年代以降の国民統合において女性、

子供、病人といった「二流の国民」をとりこんだ「国民の物語」が再編成されていったと述べている⁸⁵。その意味では、濱田が描いた植民地台湾のしかも辺境台東に住む移民村そして移民たちは、その「国民の物語」の境界線上に位置していたということができよう。しかし、物語は尾崎の言う「歪曲」＝南方移民の決意で幕を閉じることになる⁸⁶。そしてその決定は濱田が見出した同郷の農民によって下されるのであり、最後に残った「距離」までも解消させられ、「国民の物語」に取り込まれるのである。

また、矢内原が描いたユートピアは内地人、本島人、平地蕃人、高山蕃人の「協同的経済関係」の下のひとつの社会であったのに対し、『南方移民村』におけるそれは内地人限定のものであった。濱田はかつて庄司総一の『陳夫人』を評した際に、それが本島人をよく描いていることに触れ、「内地人作家も本島人の心理にはいりこむことは、彼の作家的良心が深ければ深いほど、困難なものだと思ふ。私自身も楽屋話をするやうだが、何度も手をつけては、その度に溜息をついて退却してゐる」とし、書いたとしてもその「リアリティ」に自信が持てないのだと述べている⁸⁷。『南方移民村』では、時々言及される「本島人」や「蕃人」は西部を見学に行った仲間の報告を聞いた村人が「あつちの本島人の百姓はしあはせだなや」⁸⁸というように、多くが鹿田村の悲惨さを強調する際に、その対比として用いられるのみであり、台湾農業を研究したことのある濱田にとって容易に想像できるであろう西部にいる同様に悲惨な境遇にある本島人農民という連想はなされない。そしてそのことによって、「遅し」く「美し」い移民村の歴史は完成したのである。

最後に、同時代の台湾文壇におけるこの作品の意義を考えてみたい。前述したように張文環や呂赫若はこの時期家族史をテーマとした作品を多く残したが、濱田が植民地台湾に暮らす同郷の農民を描いたのも一種の家族史として位置づけられるのではないか。台北帝大教授の工藤好美は両者の作品を比較した上で、張文環の作品に足りないのは「歴史的なるもの」であるとし、濱田の作品にあるような「歴史的意識」を備えるべきだと論じている⁸⁹。もちろん、柳書琴の指摘するような『脱歴史』の『歴史創作』⁹⁰という張文環の創作態度も考慮する必要があるが、工藤の言葉は、日本人作家、台湾人作家の両者の創作の背景としてあった学問、教育、叙述三つの歴史の蓄積の違いを的確に指摘している。両者の作品における歴史描写の異同については、稿を改めて論じたい。

おわりに

本論では、日本統治時代の台湾史と日本、台湾文壇における歴史文学の展開という二つのコンテキストから、濱田の『南方移民村』を検討することを試みた。通俗的な時代小説から、歴史を通して現代の問題を提示するという啓蒙的意味合いを持ったプロレタリア大衆文学としての歴史小説への転換という日本文壇の状況と、同様な議論を経ながらさらに学術、教育の場での歴史が日本植民地研究若しくは日本国史という枠組みの中でのみ台湾が登場する状況にあった台湾文壇という両者の異同を確認した。以上の状況と、自分の血脈を探るというもう一つの歴史小説の風潮及び1940年代台湾文壇における家族史創作の試みという背景の下で、濱田の小説は在日日本

人の土着化という社会状況や当時の政治状況とも絡み合いながら、学術、教育の二つの場では言及されることのない一定程度の、地域限定且つ公式の歴史には登場しない「台湾史」を創造することに成功したといえるだろう。そして、題材として台湾東部の移民村という、内地はおろか植民地台湾の島都台北とも遠く離れた辺境に住む一群の同郷の移民を選択することで、「国民の物語」とも一定程度の距離を置くことに成功したのである。しかし、小説の結末部分では農民が自ら南方進出という「国民の物語」に参加することを選択して幕を閉じる。

紙幅の都合により、同時代の台湾人作家、日本人、特に西川満の台湾縦貫鉄道関連作品、また同時期に日本内地、朝鮮及び満洲で展開されていた農民文学、大陸文学との比較対照の検討を十分に行うことはできなかった。今後の課題としたい。

注

- 1 戦後の台湾歴史小説に関しては陳建忠「台湾歴史小説研究芻議：關於研究史、認識論与方法論的反思」(李勤岸、陳龍廷主編『台湾文学的大河：歴史、土地と新文化 第六屆台湾文化國際學術研討會』高雄、春暉、2009年)、10-50頁。また、西川満に関しては邱雅芳『南方作為帝國欲望：日治時期日人作家的台湾書寫』(政治大学中国文学系博士論文、2009年)、269-283頁。がある。
- 2 成田龍一『歴史学のポジショナリティ』(校倉書房、2006年)、13-15頁。
- 3 張隆志「當代台湾史學史論綱」(『台湾史研究』第16卷4期、2009年)、164-165頁。また『民俗台湾』に関しては、90年代以降日台の研究者、当事者の間でその評価を巡って様々な論稿がなされたが、紙幅の関係でここでは代表的な論稿を挙げるにとどめる。川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』(講談社、1996年)、国分直一『「民俗台湾」の運動は何であったか——川村氏の所見をめぐって——』(『しにか』第8巻2号、1997年)、122-127頁、呉密察『「民俗台湾」発刊の時代背景とその性質』(藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の大東亜戦争』、東京大学出版会、2002年)、231-265頁。
- 4 周婉窈『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集』(台北、允晨、2003年)、261-262頁。
- 5 周婉窈「歴史的統合と建構——日本帝國圏内台湾、朝鮮和滿洲的『国史』教育——」(『台湾史研究』第10巻1期、2003年)、49-52頁。蔡惠光「日治時期台湾公學校の歴史教育——歴史教科書之分析——」(台湾大学歴史学研究所修士論文、2000年)、94-100頁。
- 6 磯田一雄『「皇国の姿」を追って——教科書に見る植民地教育文化史——』(皓星社、1999年)、258-265頁。
- 7 許佩賢「塑造殖民地少国民——日抛時期台湾公學校教科書之分析——」(台湾大学歴史学研究所修士論文、1994年)、前掲磯田書、265-266頁より転載。
- 8 許佩賢『殖民地台湾的近代学校』(台北、遠流、2005年)、254頁。
- 9 林初梅『「郷土」としての台湾——郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容——』(東信堂、2009年)第2章、31-85頁。
- 10 西川満「歴史のある台湾」(『台湾時報』2月号、1938年)、65-67頁。
- 11 柯榮三「有関新聞事件之台湾歌仔冊研究」(成功大学台湾文学研究所修士論文、2004年)、第6章。
- 12 尾崎秀樹『歴史文学論——変革期の視座——』(勁草書房、1976年)、139-140頁。
- 13 日本統治期における台湾人の歴史記憶共有の試みとその挫折については、陳培豊「郷土文学、歴史と歌謡：重層殖民統治下台湾文学詮釈共同体的建構」(『台湾史研究』、第18巻5号、2011年)、122-128頁を参照。
- 14 たとえば、澎湖島攻略戦を描いた、廬山「媽宮風塵録」(『台湾日日新報』、1899年3月16日-24日、連載7回)等。
- 15 小野西洲の作品に関しては成功大学人文社会科学中心の岡本真希子氏の御教示を受けた。記して謝意を表す。また潘為欣「通訳経験の転化——小野西洲土語小説「羅福星之恋」創作」(台北教育大学台湾文化研究所編『第六屆台湾文学研究学生術論文研討會論文集』台南、台湾文学館、2009年)、133-158頁も参照。
- 16 松尾直太『濱田隼雄研究——文学創作於台湾(1940-1945)——』(台南、台南市立図書館、2007年)、12-13頁。また濱田淑子編、河原功輔筆「濱田隼雄略歴」(中島利郎、河原功編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集第4巻』、緑蔭書房、1998年)、497-507頁も参照。
- 17 佃龍「歴史文学について」(『台湾新文学』第1巻5号、1936年)、52-53頁。
- 18 尾崎秀樹『大衆文学論』(勁草書房、1965年)、134-137頁。

- 19 尾崎秀樹、前掲『歴史文学論—変革期の視座—』、52-53 頁。
- 20 尾崎秀樹、前掲『大衆文学論』、134-137 頁。
- 21 貴司山治「歴史小説について」（『プロレタリア文学』第1巻14号、1932年）、63 頁。
- 22 「戯曲創作と小説道について山本有三氏と語る」（『文学案内』、第2巻1号、1936年）、120-131 頁。
- 23 渡邊順三「藤森氏の『渡邊華山』」（『文学評論』第3巻3号、1936年）、185 頁。
- 24 尾崎秀樹、前掲『歴史文学論—変革期の視座—』、58 頁より転載。
- 25 「台湾の新文学に所望する事」（『台湾新文学』創刊号、1935年）、29-40 頁。
- 26 陳培豊、前掲「郷土文学、歴史と歌謡：重層殖民統治下台湾文学詮釈共同体的建構」、125 頁。
- 27 奇「巻頭言 大衆文芸『待望』」（『南音』第1巻2号、1932年）、頁なし。
- 28 奇「巻頭言 勿講仮話」（『南音』第1巻4号、1932年）、頁なし。
- 29 奇「巻頭言 先輩の使命」（『南音』第1巻3号、1932年）、頁なし。引用文のように、当時の歴史資料採集は民間文学の視点からも検討が可能だが、本論では大衆文学論争のコンテクストの中での議論に絞った。民間文学に関しては王美恵『1930年代台湾新文学作家の民間文学理念与实践—以『台湾民間文学集』為参考対象—』（成功大学歴史研究所博士論文、2008年1月）。
- 30 頼慶「文芸の大衆化怎樣保障文芸家的生活」（『先発部隊』第1号、1934年）、6 頁。
- 31 「懸賞募集」（『文芸台湾』創刊号、1934年）、87 頁。
- 32 楚女「小評文芸大衆化」（『文芸台湾』第2巻1号、1934年）、20 頁。
- 33 「台湾文芸北部同好者座談会」（『文芸台湾』第2巻2号、1935年）、1-7 頁。
- 34 陳鏡波「軟派文学与拙作」（『台北文物』第3巻3期、1954年）、68-69 頁。
- 35 陳培豊は楊達の『三国志』翻訳、『水滸伝』への関心に込めた「政治的要素」について触れている。陳培豊「殖民地大衆的争奪—「送報伏」・「国王」・「水滸伝」—」（台湾文学館『台湾文学研究学報』、第9期、2009年）、282-287 頁。
- 36 郭水潭「長篇小説『フオルモサ』」（『文芸台湾』第2巻2号、1935年）、64-66 頁。
- 37 陳永邦「新文学四月号所感」（『台湾新文学』第1巻4号、1936年）、40 頁。
- 38 「編輯後記」（『台湾新文学』第1巻7号、1936年）、44 頁。
- 39 陳培豊、前掲「郷土文学、歴史と歌謡：重層殖民統治下台湾文学詮釈共同体的建構」、125 頁。
- 40 平山勳「『歴史小説への待望』の拔萃——『敗北の理論』第三章——」（『台湾文芸』、第3巻2号、1936年）、20-23 頁。
- 41 夏川英「台湾文学当面の問題」、（『台湾新文学』第1巻3号、1936年）、64-67 頁。
- 42 佃龍「歴史文学について」（『台湾新文学』第1巻5号、1936年）、15-16 頁。
- 43 「巻頭言 台湾新文学当面の問題」（『台湾新文学』第1巻4号、1936年）、5 頁。
- 44 佃龍「局外者の感想（上）」（『台南新報』、1936年5月29日）、黄振源「台湾時代の濱田隼雄—その人と作品—」（『文学と教育』32号、1996年）、27 頁より転載。
- 45 速河正夫「台湾に於ける農家負債」（『経済評論』第2巻3号、1935年）、99-108 頁。速河正夫「台湾に於ける蔗農の状態（資料）」（同上雑誌、第3巻2号、1936年）、58-68 頁。
- 46 「綺談安平蟹」（『台湾日報』、1936年7月4日から連載4回）。
- 47 「キナジー物語」、（同上紙、1936年8月18日-21日まで連載4回）。
- 48 松尾直太「濱田隼雄研究—日本統治期台湾1940年代的濱田文学—」（成功大学歴史研究所修士論文、2001年）、56-57 頁。
- 49 鳳氣至純平「中山侑研究—分析他的「湾生」身分及其文化活動—」（成功大学台湾文学研究所修士論文、2006年2月）、第2章、13-34 頁。
- 50 柳書琴「帝国空間重塑、近衛新体制与台湾『地方文化』」（石婉舜、柳書琴、許佩賢編『帝國裡的「台湾文化」—皇民化時期台湾文化狀況—』台北、播種者出版、2008年）、1-48 頁。
- 51 西川満、前掲「歴史のある台湾」、67 頁。
- 52 「鶏肋」（『文芸台湾』第5巻1号、1942年）、29-38 頁。
- 53 西川満「ああ『台湾縦貫鉄道』遂に完成!」（『アンドロメダ』、1978年2月号）、3 頁。
- 54 菅原庸真「『南方移民村』について」（『文芸台湾』第4巻6号、1942年）、108-109 頁、及び濱田隼雄「若い頃の文学」（『日曜隨筆』第4巻4号、1959年）。
- 55 張文環、呂赫若の家族史に関する先行研究には、林瑞明「呂赫若的『台湾家族史』与写实風格」（『台湾新文学』、9号、1997年）、302-314 頁、柳書琴「從部落到都会：進退失抛的殖民地青年男女—從「山茶花」論張文環故郷書写的脈絡—」（『台湾文学学報』第3期、2002年）、81-107 頁、等がある。

- 56 陳培豊、前掲「郷土文学、歴史と歌謡：重層殖民統治下台湾文学詮釈共同体的建構」、125頁。
- 57 「鶏肋」(『文芸台湾』第5巻1号、1942年)、29-38頁。
- 58 「作家濱田隼雄の軌跡」(初出は台湾大学主催「日台シンポジウム《近代日本と台湾》」、1998年、また『成蹊論叢』第38号、2000年に所収)、本論は河原功『翻弄された台湾文学—検閲と抵抗の系譜—』研文出版、2009年、145-146頁を参照。
- 59 松尾直太、前掲「濱田隼雄研究—日本統治期台湾1940年代的濱田文学—」、309-325頁。
- 60 河原功、前掲論文、149-157頁。
- 61 濱田隼雄「技師八田氏についての覚書」(『文芸台湾』第4巻6号、1942年)、201-202頁。
- 62 張文薫『『外地』的意義—濱田隼雄の文学軌跡—』(陳芳明主編『台湾文学的東亜思考—台湾文学芸術と東亜現代性国際学術研討会論文集—』台北、2007年)、385-386頁。
- 63 若松伸哉「〈満洲〉へ移される〈故郷〉—昭和十年代・大陸(開拓)文学と国内文壇にあらわれた〈故郷〉をめづつて—」(『国語と国文学』、第84巻4号、2007年)、43頁。
- 64 濱田隼雄「若い頃の文学」(『日曜随筆』第4巻4号、1959年)、15頁。
- 65 同上。
- 66 張文薫、前掲論文、388頁。
- 67 田代豊「小説『南方移民村』と移民政策」(『台湾時報』、275号、1941年)、104頁。
- 68 濱田隼雄『南方移民村』(海洋文化社、1942年)、本論は中島利郎、河原功編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集第3巻』(緑蔭書房、1998年)を底本とした。頁数も底本のものを使用する。以下同じ。431-432頁。
- 69 竹村猛『『南方移民村』近傍』(『文芸台湾』、第5号1巻、1942年)、261-263頁。
- 70 金沢吉次郎「台湾に於ける移民民事業の展望」(『台湾時報』、6月号、1933年)、23頁。例えば官営移民村の吉野村は徳島県出身者が多数であった。
- 71 作中人物の東北方言の使用の指摘については、菅原庸真『『南方移民村』について』(『文芸台湾』第4巻6号、1942年)、109頁。
- 72 濱田隼雄、前掲『南方移民村』、17頁。実在の医師神田全次は富山出身。
- 73 同上書、301頁。この時期に新潟出身の五十嵐喜一郎が大武庁の支庁長になっている。許雪姬総策画『台湾歴史辞典 附録』(台北、行政院文化建設委員会、2004年)、186頁。
- 74 尾崎秀樹、前掲『歴史文学論—変革期の視座—』、78頁。
- 75 尾崎秀樹、『近代文学の傷痕』(岩波同時代ライブラリー、1991年)152-153頁。『石狩川』については、布野栄一の詳細な研究がある。布野栄一『本庄陸男の研究』(桜楓社、1972年)。
- 76 前掲「鶏肋」、29-38頁。また濱田の他に、川合三良も「自分の父親のことを前から書きたいと思つてゐる」と述べている。
- 77 松尾直太、前掲「濱田隼雄研究—日本統治期台湾1940年代的濱田文学—」、附録年表。
- 78 河原功、前掲論文、148頁より転載。
- 79 「東台湾の産業(七)ドン底生活の鹿野村台東発展の一つの癆」(『台湾日日新報』、1932年4月21日)、第5版。
- 80 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』(1929年)。本論は若林正丈編『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』岩波書店、2001年)を参照した。232-233頁。
- 81 速河正夫、前掲「台湾に於ける蔗農の状態(資料)」、59頁から濱田が矢内原の著作を読んでいたことがわかる。
- 82 尾崎秀樹、前掲『近代文学の傷痕』、152-153頁。
- 83 濱田隼雄「文芸十話4」(『河北新報』、1971年2月3日)
- 84 濱田隼雄、前掲『南方移民村』、346頁。
- 85 成田龍一、『(歴史)はいかに語られるか—1930年代「国民の物語」批判—』(日本放送出版協会、2001年)、259頁。
- 86 結末部分の「歪曲」という表現は戦後濱田の回想にも見られ、濱田はそれが東京での出版の関係で、検閲と出版の許可のためにやむを得ないものであったと述懐している。濱田隼雄、前掲「文芸十話4」。また、当時の評論にも唐突な結末に疑問が提示されている。例えば、工藤好美「台湾文化賞と台湾文学—特に濱田・西川・張文環三氏について—」(『台湾時報』、279号、1942年)、109-110頁。また『文芸台湾』に掲載された同書の出版広告にも「かうした長い時間を取扱つたにもかかはらず、筋の破綻としては『終章』の部分の安易な解決以外にはないやうであるが」という評価が付されている(『文芸台湾』第5巻4号、1943年)。
- 87 濱田隼雄「庄司総一氏の陳夫人について」(『台湾時報』、257号、1941年)、348頁。
- 88 濱田隼雄、前掲『南方移民村』、259頁。
- 89 工藤好美「台湾文化賞と台湾文学—特に濱田・西川・張文環三氏について—」(『台湾時報』、279号、1942

年)、109-110 頁。

- 90 柳書琴、前掲「従部落到都会：進退失抛の殖民地青年男女——従「山茶花」論張文環故郷書写的脈略——」、107 頁。

【付記】

本稿は、「日本台湾学会第十三回大会」（於早稲田大学）における報告を加筆、修正したものである。報告においてはコメントーターの松永正義先生をはじめ、諸先生方からアドバイスをいただきました。また二名の査読者からも貴重なコメントとご意見を賜りました。記して深くお礼申し上げます。